
河上肇記念シンポジウム

主催： 京都大学大学院経済学研究科・経済学部
京都大学上海センター
京都大学 21世紀 COE プログラム
「先端経済分析のインターフェース拠点の形成」

中国と日本の政治経済学

パネル： 三田 剛史 (『甦る河上肇』著者、日本学術振興会特別研究員)
張 小金 (厦門大学教授)
大西 広 (京都大学経済学研究科・教授)
本山 美彦 (京都大学経済学研究科・教授)
山本 裕美 (京都大学経済学研究科・教授)
司会： 八木 紀一郎 (京都大学経済学研究科・教授)

2005年3月16日(水) 午後2時から5時
京都大学時計台記念館百周年記念ホール



八木: それでは時間になりましたので、河上肇記念シンポジウムを開始したいと思います。

最初に経済学研究科・経済学部評議員の田中秀夫教授に開会の挨拶をいただきます。

田中: ただいまご紹介いただきました田中です。研究科長・学部長の西村教授が所用で参ることができませんので、代わってご挨拶申し上げます。皆様本日は多数ご来場いただきましてありがとうございます。本日のシンポジウムは河上肇記念会、東京河上会、京都及び山口の河上会など各地の河上会、同窓会などのご協力を得まして経済研究科のCOEプログラムとして開催されるものであります。関係者に厚くお礼を申し上げたいと思います。

河上は申すまでもなく、偉大な我々の経済学部先達であります。これまで学部はいろいろ節目に河上を回想するというようなことをやってまいりました。ですが今回、COEのプロジェクトとして本格的にそういったことをしようということになったわけでありす。5分で挨拶をしろというふうに言われていますので、あまりいろいろなことを申すわけにもいきませんが、ちょっと個人的なことを申し上げたいと思います。

私のようなものにも河上肇体験というものがございます、河上のほうで最初に読んでいるのはやはり『貧乏物語』であります。私は団塊の世代といわれる世代でありまして、滋賀県の八日市という町で育ったのですが、今世間を騒がせております堤義明の父であります堤康二郎という人が生まれたのが、近隣の秦荘という町であります。だからあまりありがたくないのでありますけれども、私の子どもの頃までの印象で申しますと、当時はまだまだ貧しかったという印象がございます。ですから河上の「貧乏物語」を、いわば経済学への道しるべとして読んだという印象がございます。大学に入りましてからは、既に高度成長がありまして豊かになっておったのですが、やはり日本がその当時のアメリカの世界戦略の中に組み込まれているのじゃないかという時代でありましたので、自ずから河上的な精神というものを振り返るということがあったように思います。

私の研究室には、河上が弟子の石川興二に宛てた有名な書のコピーがあります。そこには、「およそ学に志すものは才の乏しきを悲しむなかれ。努ることの足らざることを恐れよ」という有名な文章があるわけですが、以前は河上のこの言葉に励まされることがあった方も非常にたくさんおられたのではないかなと思うわけでありす。

これから河上を記念して司会者を含めまして6名の方によるシンポジウムが始まります。「中国と日本の政治経済学」というテーマは極めて興味深いものであります。また、パネラーとして政治経済学に関わる領域で活発なお仕事を展開されている方々が本日はお集まりでありますから、どのような議論がされるか極めて興味深いものがございます。どうかパネラーの皆様には忌憚のないいい討論を繰り広げていただきたいと思います。また皆さんにはご静聴をお願いしたいと思います。

そして河上肇の精神を伝統としていかに継承すべきかということにも思いを馳せていただくことができることを願っております。はなはだ簡単ではありますが、以上研究科長に

代わりましてのご挨拶といたします。

(拍手)

八木：それではパネラーの方、壇上にお上がりください、お願いします。

(パネラー壇上へ)

八木：それではシンポジウムに入らせていただきます。申し遅れましたが私は本学の八木と申します。パネリストの中に名前が上がっておりますけれど、このシンポジウムでは司会の役割に徹したいと思っています。といっても司会の権限を濫用して余計なところで口を挟むかもしれませんが、それはどうぞご寛容をお願いします。

このシンポジウムを「中国と日本の政治経済学」というテーマにしたことについて最初に少し説明をさせていただきます。本学は河上肇の講演会を生誕 100 周年の 1979 年に開催しておりますが、その後の四半世紀の間にいったい何が変わったのでしょうか。重要な変化の一つとして、日本の思想や日本の経済が全体としての東アジアの発展というなかで再度位置付けられ直すということがおきているように思います。その中で今回おいでいただきました三田剛史先生が『甦る河上肇－近代中国の知の源泉源』という大きな本を出されました。これは私のように京都大学にいる者を震撼させるような研究で、京都大学において河上のもとで勉強した中国の留学生、あるいはそれだけでなく、河上の影響を受けた中国の留学生を細大漏らさず調べあげて、河上肇の思想の歩みというのが単に日本だけの事件ではなく、東アジア全体にかかわる意義をもつ知的事件であったことを論証しています。そういうこともありまして、私たちは河上肇によって定着させられた政治経済学というものを東アジアの中で位置付けて考えてみたいと思いました。それが、このシンポジウムのタイトルの所以です。

今回は中国からも厦門大学教授の張小金先生においでいただきました。張先生は、中国において初めて資本論を翻訳・完訳された王亜南先生について論文を書かれて、そのエッセンスを今日お話いただくことになっています。もちろん李大釗とか陳独秀、毛沢東なども、例えば河上との対比ということで考えるべき人かもしれませんが、一応経済学というかたちで考えますと、日本ではあまり知られていませんが、マルクス『資本論』の中国語訳を完成した王亜南先生もある意味では河上肇に匹敵する仕事をされた方です。ですから、王亜南先生を重要な比較の対象として考えて、私たちの視野を広げることができるのではないかと思います。

そうしたかたちで、はじめに三田先生と張先生のお二人から、河上に始まる思想及び経済学を東アジアの中で位置付け、比較していくという視野を得たいと思っております。そのあと若干お休みをとりまして、学部のほうから 3 人の教授にパネリストとしてのお話し

いただきます。大西広、そして本山美彦、山本裕美の3教授です。

大西教授は本学の社会統計学の担当教授で、最近では中国と日本、あるいはアジア太平洋地域の環太平洋の統計的な分析を精力的になさっていて、中国との交流も広い方です。非常におもしろいご意見を中国の社会主義や、それからかつてのソ連の社会主義についてお持ちなので、今日はそんな話も聞けるのではないかと考えております。

本山教授は本学の国際経済学の担当の教授で、アメリカ流のグローバリゼーションへの歯にきぬを着せない批判で知られる方です。今回のレジュメを拝見しますと、中国の思想の問題まで含めてご発言されるようで、私も楽しみにしております。

最後に山本教授は、農業経済をベースにして中国経済論を研究されておられますが、今回の企画の共催者となっております京都大学上海センターの所長を務められています。このセンターは、京都大学のこれまでのアジアとの関係をベースにしながら、新しいかたちでの研究をしていくということで本学の経済学部数年前に設置されました。研究・教育、そのほか社会的・経済的活動のための国際的なセンターでございます。

こうした3人の方を学部の側からパネラーとして出して討論をしていきます。

それでは最初に三田先生に20分ぐらいお話をいただきたいと思います。三田先生、どうぞよろしくお願いします。

三田：三田剛史でございます。私はこの数年、河上肇の思想とその中国への影響、それから中国の思想的伝統と河上肇との関わりということについて勉強しております。本日はこの河上肇^{ゆかり}縁の京都大学で報告の機会を与えてくださり、非常に感謝いたしております。どうもありがとうございます。どうぞ、私の報告に対してご叱正とご指導のほどお願いいたします次第です。

一 河上肇と中国の政治経済学、中国知識人との関わり

河上肇は1879年、現在の山口県岩国市に生まれました。生前の河上肇の活動舞台はほぼ日本に限られ、ヨーロッパ留学の途上で上海と香港に立ち寄った以外、中国を訪れたことはありませんでした。1928年、京都帝国大学経済学部の教授を辞職することを迫られてからは、マルクス・レーニン主義の啓蒙に努め、共産主義革命の実践運動に加わっていましたが、当時の日本の時代状況は河上肇に活動を続けさせることを許さず、1933年に逮捕・投獄され、約4年半に及ぶ獄中生活のあとは隠遁生活を余儀なくされました。第2次世界大戦終結後、河上肇にはもはや活動を再開する余力は残されておらず、1946年1月30日、ここ京都で死去しました。河上肇の学問も実践も未完に終わったといえるでしょう。

しかし、京都大学に留学して河上肇の教えを受け、あるいは河上肇の書物を通じてマルクス主義を学んだ中国の知識人は、彼らの祖国でマルクス主義の中国への適用を模索し、革命運動を繰り広げ、1949年の人民共和国成立にも参与しました。単に河上肇が中国に影